

石巻・旧大川小 児童74人、教職員10人犠牲

84本竹灯籠 未来照らし 記憶つなぐ



東日本大震災から11年となる3月11日、津波で犠牲になった石巻市旧大川小児童の遺族らが、手作りの竹灯籠を使った追悼行事を旧校舎そばで開く。児童74人、教職員10人の犠牲者と同じ84本の竹筒に明かりをともす。大川小が昨年7月に市の震災遺構として整備されて初めて迎える節目。未来を照らす光に事故の記憶を語り継ぐ決意を込める。

遺族らでつくる「大川竹あかりプロジェクト実行委員会」が企画した。当日は旧校舎西側の「慰霊と追悼の広場」に発光ダイオード(LED)電球を使った竹灯籠を設置。午後5時半に明かりをつけ、遺族や地域住民、訪れる人と犠牲者へ追悼の祈りをこめ、

東日本大震災
10年
11ヵ月

をこめ、全国各地で作品を手掛ける竹あかり演出家の池田雅生さん(39)＝熊本県南関町＝が竹灯籠の配置やデザインを担う。池田さんによると、高さ約50センチのオブジェを中央に置き、取り囲むように84本の竹灯籠を並べる。オブジェには未来と希望、天と地をつなぐ願いを託す。池田さんは「亡くなった人たちが生きていたということと未来につなきたい」と話す。

3月11日 遺族ら追悼行事

震災から11年を迎える中、遺族らは大川小事故や犠牲者への関心が薄れることに危機感を強める。記憶の風化を防ぎ、大川小に気持ちを寄せ続けてほしいとの思いから計画した。

1月30日には児童遺族ら9人が大川小に近い石巻市針田地区の林で材料となる竹を切り出し、長さ30センチに切りそろえた約60本を運び出した。今月8日に池田さんが現地を訪れ、竹灯籠の制作指導に当たる予定だ。

実行委の共同委員長で、大川小6年だった三男雄樹君(当時12)を津波で失った佐藤和隆さん(55)は「遺族だけの取り組みではなく、さまざまな人に携わってもらえる長い活動にしたい」と語る。

竹灯籠に使うための切り出し作業。1月30日、石巻市針田地区